
ダークヒロイン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークヒロイン

【Nコード】

N3689D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

長旅の末に魔王の城にまでやって来た冒険者。ところがその魔王はとびきりの美少女で。面白おかしいファンタジーです。

第一章

ダークヒロイン

「遂にここまで来たな」

長い旅だった。長い戦いだった。

俺は所謂旅の冒険者だ。名前をアングスという。職業は一応魔法戦士だ。酒場で仕事を受けてその報酬やモンスターだの盗賊だのをやっつけてその財宝を手に入れて生きている。頼りになるのは俺自身の剣と魔法、その二つだけで今までやってきている。

俺は大抵仕事は一人で行っている。そっちの方がやり易い。だから今回も一人だ。一人で仕事をしていた。

その今回の俺の仕事は依頼された仕事じゃない。財宝目当てだ。この山脈の奥深くに魔王の城があつてそこに見たこともない財宝があると聞いたからだ。魔王をぶっ殺してその財宝を手に入れる。魔王と言えば悪い奴に決まっているから遠慮はいらねえ、こう考えてもいた。

それでその城に向かったのだがこれがまた大変だった。悪い妖精や悪霊だけならともかく森に棲むドラゴンのグリーンドラゴンまでいた。幸いそいつは温厚な奴だったので大事には至らなかったが山じゃグリフォンだのキマイラだのに遭った。おかげで何度か死にかけた。

それでも何とかここまで来た。何もない岩山が連なるその真ん中の山の頂上にその城が見える。漆黒の城で見るからに悪の魔王の城だ。

「あそこだな」

もう言うまでもなかった。俺はその城に向かった。流石にもうここまで来てモンスターはいなかった。さっき追い散らしたハーピーの群れが最後だったらしい。

城門のところまで来るとやっぱり真っ黒だった。どんな石を使っ

ているのか不思議な位だった。

城門のところには門番でゴーレムがいた。これはお約束だった。しかも鋼鉄で造られたゴーレムだ。また随分と手強い相手だった。「ちっ、それでもな！」

殴りかかってきたゴーレムの攻撃をかわしてすぐに身構える。こんな奴には剣は役には立たない。それならそれで方法がある。俺は魔法を使うことにした。

「伊達にここまで来てるわけじゃねえんだよ！」

強酸の魔法を使った。左手から濃い緑色の液体が放たれる。それで一気に溶かしてやるつもりだった。

実際にそれは上手くいった。強酸を受けたゴーレムは動きを止め忽ちのうちに溶けていった。鉄でできた奴とも何度も戦っている。そうした奴にはこの魔法だった。他には雷の魔法なんかが有効だ。とりあえず直接攻撃は全く意味がない。

「魔法を覚えていてよかったな」

俺はあらためて思った。剣だけじゃとてもここまでは生きていられなかった。一人でやっていくにはあまりにも危険なのは事実だ。特に剣だけ、魔法だけじゃとてもだ。両方使える俺はそういう意味で本当に上手くやっていけていた。

ゴーレムから鍵を見つけた。門番が鍵を持っているのが随分お約束だったがいっものことなので気にせずそれを手に取った。そうして鍵を開けて城の中に入った。

城の中には誰もいない。やっぱり真っ黒な壁や床に真っ赤な絨毯が敷かれている。壁にかけられている絵や立てられている彫像はどれも不気味なやつばかりだ。悪魔だの幽霊だのそんなのばかりだ。そういうのを見ているとここがやっぱり魔王の城なんだって思う。けれど妙だ。俺は城の中を進むうちにこう思いだした。

「誰もいねえのかよ」

そこだった。何か誰もいないのだ。

「逃げたか？まさかな」

それはないと思った。流石に魔王だ、逃げるなんてことはない筈だ。

「じゃあ一体」

俺は首を傾げながら城の中を進んでいった。罨も何もない。一応それを警戒する魔法もかけておいたがそれにも反応が全然ない。今まで色々な場所を冒険してきたがこんなことはなかった。俺はいぶかしみながら奥に進んでいった。そうして一番奥にいたのは。

「来たわね」

「えっ!？」

所謂魔王の間だった。そこはやたら広く左右も天井も随分広かった。後ろに何か紋章が書かれていてその前に玉座がある。何段かの階段の上にあるその玉座は金で造られていてやけにみらびやかだ。もつともそこに座っている魔王はそうじゃなかったが。

俺は今驚いた声をあげたがその理由はこの魔王にあった。何と緑色のショートヘアに赤いくりっとした大きな目に白い死人みたいな肌。頭の左右には羊の角があって背中には黒い蝙蝠の翼がある。その顔は幼いけれど丸みがあってやけに可愛い。姿形はまんま女の子だ。黒いくるぶしまで隠れる服はもうお約束だった。

「勇者よ、私を倒す為に来たのね」

「誰なんだあんた一体」

「私がこの城の魔王よ」

自分で言ってきた。やっぱりそうだった。

「名前はカーラ」

「カーラ!？」

「そうよ、魔王カーラ」

また名乗ってきた。

「それが私の名前よ、わかったわね」

「わかったけれどよ。しかし」

「しかし? 何よ」

ああ、カーラちゃんっていうのか。何でちゃん付けになっている

かって？すぐにわかるさ。

「それはまた」

「私を倒して財宝を奪いに来たのね」

カーラちゃんは俺にそう問うてきた。玉座に座ってその赤い可愛い目で俺をキッと見据えてきて。またこりや随分と可愛いことで。

「そうなのね？答えなさい」

「最初はそうだったさ」

俺はこうカーラちゃんに答えた。

「最初は？」

「そうさ。けれど今は」

カーラちゃんを見詰めたまままた言う。

「違うな」

「どういうことなの、それは」

「なあ」

「!？」

素早さには自信がある。だから今までやってこれた。カーラちゃんが驚いたその隙に俺は駆け寄った。しかし随分とろい魔王様だと思った。いっぱしの冒険者に間合いを詰められるなんて。

俺はすぐに玉座のところに行ってカーラちゃんを抱き締めた。迷うことはなかった。

「気が変わったんだよ」

「気が変わった!？それに」

明らかに狼狽していた。顔が啞然としている。声もうわずつていゝる。まさかこうなるなんて夢にも思わなかった感じだ。けれどこうなったら俺のものだった。

「一体何を、無礼な」

「無礼な!？」

「そうよ、私は魔王よ」

自分でそこを強調してきた。

「魔界にもその名を知られた魔王カーラを、人間風情が」

「人間風情って言うけれどさ」

何かお決まりの台詞なんで心の中で苦笑いを浮かべながら言っ
てやった。

「そんなの関係ないんだよ」

「関係ない!？」

「そうさ。好みなんだよ」

俺は言っ
てやった。

「あんたがさ。可愛いから」

「えっ、可愛い」

魔王でも女の子だ。やっぱりこの言葉には反応してきた。顔が少
し赤くなっていた。

第二章

「私が。まさか」

「少なくとも俺はそうさ。だから冒険なんてどうでもいいんだよ」

「いいって。それじゃあ」

「付き合わない？俺と」

カーラちゃんを抱き締めたまま耳元で囁いた。玉座に縛り付けている感じで逃げられないようにした形で。何か卑怯だけれどそれでも囁いた。

「どうかな」

「貴方と！？」

「そうさ。どう？」

またカーラちゃんに囁いた。

「カーラちゃんだったよね」

「え、ええ」

何だかんだで乗り気みたいだった。ちゃん付けで呼ばれても怒らない。

「別に財宝なんていらないし。だから」

「私と。付き合う」

「そう。駄目かな」

横目でその表情を窺いながら尋ねる。どんな感触かを見る。

「俺でよかったらさ」

「馬鹿を言えっ」

やっぱりだった。まずはこう言い返してきた。

「この私がどうして人間なぞと」

「嫌だっていうんだね」

「そうだ。私は魔王だ」

この言葉も予想通りだった。けれど顔が赤くなっているのはもう見抜いていた。これは思ったより純情な相手だ。見ながらそう考え

ていた。

「どうしてそんなことが」

「じゃあさ。聞くけれど」

「何だ？」

カーラちゃんは俺に問い返してきた。よし、いい感じだ。

「魔王は負けちゃいけないんだよね」

「そうだ」

これはまあ常識で。強いから魔王なんだよな。

「それがどうしたというのだ」

「じゃあもう失格じゃない、魔王が」

「何っ!？」

「だってほら」

ここで一気に一撃を繰り出す。まあこれで大分決まるところ。

「今こうやって俺に完全に捕まってるんだしさ。攻撃も魔法も使えないでしょ」

「くっ……」

それは認めるしかないみたいだった。歯噛みしているのも横目から見える。

「それは……」

「そうだよね。事実でしょ？」

「事実なら。どうするつもりだ」

「だから付き合ってよ」

これはさっきから言っていることで。何か向こうは全然認められないことみたいだ。

「俺とさ」

「付き合ったらどうするんだ？」

「別に」

俺はくすりと笑って答えた。

「悪いようにはしないよ」

「悪いようには？」

「そうさ。だって惚れたんだもん」

さて、一撃を浴びせたけれど。どうなるかな。

「カーラちゃんにね」

「カーラちゃんだと」

「そうだよ。魔王だろうが何だろうが可愛いんだし」

「可愛い！？私が」

おやおや。そろそろ反応が変わってきたかな。いい感じいい感じ。

「この私がか」

「可愛いからこう言ってるんだし。どうなの？」

「どうなのって」

「付き合ってくれる？」

また尋ねた。さあ、今度でいけるかな。

「俺と」

「付き合ったらどうなるの？」

おっ、来た来た。いい感じに。

第三章

「貴様……いえ貴方と付き合ったら」

「幸せになれるよ」

そう囁いた。

「それでね」

「一緒になればいいか」

「どう？一緒になる？」

ここでまた囁いて。さあ、今度で遂にかな。何か思ったよりガードが固いけれど。

「俺と」

「それは私だって年頃だし」

「そうだったの」

「まだ。十七よ」

おいおい、タメ！？ちょっと待てよ。

「十七っておい」

今度は俺が驚いちゃった。

「俺十七なんだけれど」

「えっ！？」

カーラちゃんも驚いていた。何か実際の容姿より幼く見える感じなんぞ。ついついもっと小さいのかなって思ってたけれど。これは意外だった。

「同じ歳なの」

「ああ、そうだよ」

俺は驚きを隠せないままカーラちゃんに答えた。

「何だよ、それって」

「けれど。かえっていいわ」

それでもカーラちゃんはこう言ってきた。

「それもね」

「いいのかよ」

「だって。同じ歳ならかえって」
むしろいい感じになってきた。これは計算外だったけれど俺にと
っては運がよかった。

「安心できるわ。それだったら」

「いいの？」

「ええ」

真っ赤な顔になって。こくりと頷いてきた。

「いいわ。私の貴方と一緒に」

「よかった。そう言ってもらえると嬉しいよ」

何か俺の方が大喜びで。思わずカーラちゃんを抱きかかえて玉座
の上で小躍りしだした。

「やったね、カーラちゃんと一緒になれたよ」

「あつ、ちよつと」

カーラちゃんは抱きかかえられてその姿勢で俺に戸惑った顔を見
せてきた。

「そんなにはしゃがないで。はしゃぐのは」

「はしゃぐのは？」

「まだ先よ。ここじゃないわ」

「ここじゃないって」

「場所。変えましょう」

視線をそつと逸らして述べる。

「私の部屋に」

「カーラちゃんの部屋？」

「ベッドがあるから」

おいおい、またそりゃ積極的な。いきなりそれかよって心の中で
思っちゃまった。

「そこでね」

「いいの？」

俺は一応尋ねた。この初々しさから見てそうした経験は全然ない

ようにしか見えなかったからだ。やっぱり経験のない相手にはそれなりのことをしなくちゃいけない。

「それで」

「ええ、いいわ」

カーラちゃんの返事は決まっていた。

「それで。いいわよ」

「わかったよ。じゃあ寝室まで案内して」

「わかったわ。けれどね」

また注文が来た。恋する女の子ってのは注文が多いものだ。

「このままで連れて行って」

「抱きかかえたまま？」

「ええ、このままね」

そう俺に言う。

「それで御願いできるかしら」

「わかったよ。それじゃあ」

俺はその言葉に頷いて。カーラちゃんに案内されて彼女の寝室に向かった。何か魔王もこうしてみると普通の女の子で当然ベッドの中でも普通の女の子だった。それも最高の。

一夜明けて一緒に朝御飯を食べるけれど。ここでふと気になった。

「この朝御飯さ」

「何？」

「誰が作ってるのかな」

テーブルの向かい側に座るカーラちゃんに尋ねた。

「よかったら教えて」

「私が作ってるのだけれど」

「カーラちゃんが？」

「そうだけれど」

パンとスープに卵を焼いたもの。これだけだけれど味がかなりよかった。ミルクまであって冒険者としては滅多に食べられない御馳走だった。

「一応執事とかはいるけれどアンデッドだからお料理とかは」

「できないんだ」

「スケルトンなの」

確かにスケルトンだと料理はできそうもないなと思った。これがゴーストとかゾンビでも同じだけれどとにかくアンデッドにはそうそう料理は無理だ。

「だからお料理は私が」

「じゃあこれってカーラちゃんの手料理なんだ」

「そうなるわ」

恥ずかしそうに顔を赤くさせてこくりと頷いてきた。それから俺に尋ねてきた。

「美味しい？」

「美味しいって言ったらどうなるの？」

「それはやっぱり嬉しいわ」

実にわかりやすい返事だった。

「折角作ったんだし」

「そうだね。美味しくね」

俺もそれに応えて言った。

「美味しいものを一緒に食べると余計にね」

「気に入ってもらえたんだ」

「そうだよ。だからこれからも時々ここに来ていいかな」

道のりはかなり険しいけれどその価値はあると思った。カーラちゃんはこの料理があるのなら。それだけでここまで来る価値は充分だと思った。

「時々？」

「うん、時々」

俺はにこりと笑ってカーラちゃんに言った。何かもうこの娘が魔王だってことは完全に忘れていた。そんなことはもうどうでもよかった。

第四章

「それでいいかな」

「駄目よ、そんなの」

けれどカーラちゃんはここで口を尖らせて眉を顰めさせて俺に言うてきた。

「時々だなんて」

「じゃあどうすればいいんだい？」

「ずっといて」

それがカーラちゃんの言葉だった。

「ここに。ずっといて、御願いだから」

「いていいの」

「だって。一緒になりたかったんでしょ、私と」

「うん、そうだよ」

それは本当のことだ。だから倒すより抱き締めたわけで。それを言われると俺としても正直辛いけれど本当のことだから否定できない。俺は嘔吐きじゃない。

「そうだけれど」

「それだといいでしょ？」

また俺に言うてきた。

「私はそれでいいから」

「じゃあここで二人で暮らすの？」

「お金と食べ物はあるわ」

魔王だからそれはあるみたいだ。

「丁度お婿さんも探していたし」

「そうだったんだ」

これは意外だった。ところが俺がこれから聞く言葉はもっと意外だった。

「人間でも誰でも。私を最初にやつつけられた人をお婿さんにつて

考えていたし」

「それが俺だったんだ」

「そうじゃなくても。ね」

ちらりと恥ずかしそうに俺を見てきた。

「昨夜のこともあったし」

「責任も取れって？」

「それは違うけれど」

そこまで堅苦しくはないらしい。それでも何か随分とお堅い女の子だとは思う。それも魔王だからかな、とは思うけれど。言い換えれば純情に見えた。

「あまり上手くはいえないけれど。その」

「俺が。好きだってこと？」

「そういうこと。簡単に言えば」

遂にそれを自分でも言ってきた。

「それでいいわよね」

「いいよ。カーラちゃんさえよかったら」

「よかった。じゃあずっと一緒にいてくれるのね」

「俺は今からカーラさんのお婿さんなんだね」

「それは違うわ」

けれどそれは否定された。

「そうじゃないわ」

「じゃあ何かな」

「私の。御主人様よ」

顔を桜色にさせてきた。何かこうして見たら顔の色がめまぐるしく変わるお嬢様だった。

「それで私は」

「俺の奥さんってわけだね」

「そうよ。じゃああなた」

いきなりあなたと来た。完全に本気だった。

「これから宜しく御願います」

「うん、奥さん」

しかも俺も本気になっていた。もうお互い止まらなかった。

「これからずっとね」

「はい」

最初は仕事だったのに何時の間にかこんなことになっちゃったと思いつけられた。今俺の横にいるのは魔王じゃなくて奇麗で可愛い女の子だった。その娘とずっと一緒にいられる俺は幸せ者だとつくづく思う。魔王でも中身は変わらない。可愛い一人の女の子だった。

ダークヒロイン

完

2007・11・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3689d/>

ダークヒロイン

2010年10月8日15時04分発行